

災害文化の形成と継承に関する社会学的研究

－北海道における津波災害と噴火災害を事例として－

学位論文内容の要旨

本論文は、北海道奥尻町および有珠山周辺地域を事例に、災害を経験した人々がどのような「災害文化」を形成・継承していくのか、また、その形成・継承の要因となっているものは何かということについて、災害社会学的な観点から論じたものである。

災害についての社会科学研究は近年急速に進んでおり、その中でも、災害にかかわる社会・文化的側面についての注目が集まっている。本研究における「災害文化」は、災害体験の継承をもとに個人や地域社会が防災・減災のため、あるいは、災害からの復興のために果たしうる有形無形の文化のことである。本研究はこの災害文化に焦点を当てながら、これまでの災害研究において取り組みの少なかった長期にわたる災害の社会的影響について、津波被災地である北海道奥尻町と噴火常習地である有珠山周辺地域について研究したものである。研究手法は長期にわたる綿密なフィールドワークを軸にしている。

本論文は、第1章で災害についての社会科学研究のレビューと研究目的が述べられ、第2章で災害文化をめぐる理論的検討がなされたあと、第3章で奥尻町、第4章で有珠山周辺地域の事例が研究され、第5章でそれらを踏まえて「災害文化」について総合的な考察がなされ、第6章で結論が述べられる、という構成になっている。

第1章では、まず災害研究で先鞭をつけたアメリカにおける研究動向、ついでその影響を受けて進んだ日本の災害研究が順にレビュー・整理され、それを踏まえて本論文の研究目的について述べられる。本論文の研究目的は、これまで少なかった災害の長期的影響を明らかにしつつ災害文化の形成・継承についてとくにその要因を探ることにある。

第2章では、日本における「災害文化」研究の系譜が整理され、これまでの研究の成果とそこで不足していた領域が指摘される。すなわち、災害の長期的な影響に着目し、一つのフィールドに長期間にわたってかわりつづける研究が不足していたこと、また、災害文化がどうやって形成され継承されるのか、それを誰が担うのかといった点について災害因や犠牲者の有無による相違等を論じた研究が不足していたことが論じられる。

第3章では、奥尻町の事例が研究される。奥尻島は1983年の日本海中部地震および1993年の北海道南西沖地震による津波被害に連続して遭っている。1983年の津波被害が災害文化となって1993年の津波被害のときに生きた部分もある一方、防災的見地からは不十分な災害文化だった部分もあることが明らかにされる。さらに、1993年の甚大な津波被害がその後奥尻町の住民たちにどのような災害文化の形成・継承をもたらしたのかが、長期にわたる詳細な調査によって明らかにされる。ここで注目されたのが行政や住

民たちによる追悼行事で、この追悼行事がいかなる担い手によっていかなる内容で推移してきたかを見ることにより、奥尻島における 1993 年以降今日までの災害文化について検証が加えられる。さらに、奥尻島における行政、学校、家族、個人といったさまざまなレベルにおける防災教育の推移と現状が分析され、災害文化を継承していくしくみに困難があることが明らかにされる。

第 4 章では、有珠山周辺地域、とくに壮瞥町が取り上げられる。壮瞥町では 1977 年噴火の後に防災教育の活動が本格化しているが、これの分析を通し、当該地域では過去の災害の教訓を生かしていくという必要性に基づいて「災害経験の定位」がなされていること、しかもそれが科学的根拠に基づいた正確な知識の普及が必要であるという認識のもとで行われていること、さらに、その中で「火山との共生」という災害観が醸成され地域の「噴火災害文化」の核となっていることが明らかにされる。そして、壮瞥町でこのように「災害文化」の形成・継承がなされている要因として、(1) 噴火の「常襲性」、(2) 継続的な防災教育の実施、(3) 多様な担い手の存在、(4) 担い手に関わる災害観の共有があることが論じられる。

第 5 章では、以上の章を踏まえて、北海道の津波被災地と噴火被災地における「災害文化」の形成と継承について、災害因、常襲性、人的被害に着目した総合的な考察がなされる。災害因による比較からは、津波災害と噴火災害の特徴に由来する差異が示される。すなわち、(1) 津波災害に関しては、災害文化が、避難行動に結びつく「地震＝津波」という知識や体験に基づく規範・価値という要素に特化すること、(2) 津波は経験を伝える「モノ」が残りにくいため、「モノ」以外で災害を伝える工夫が求められるということが指摘される。噴火災害については、(1) 火山は非常に個性的であるため、それぞれの火山の特徴に基づいた「噴火災害文化」が形成されること、(2) 噴火災害は地殻変動や噴出物などによって被害をもたらす特徴があるため、「モノ」によって災害を伝えることが可能であるという特徴が指摘される。さらに、災害の常襲性による比較では、災害常襲地ではない地域では、災害経験に由来する知識や規範・価値といった側面が災害への危機感の薄れとともに潜在化してしまう傾向があること、一方、災害常襲地では次なる災害への備えを念頭に置いた「災害文化」が形成され、恵みと災害をもたらす「自然との共生」という災害観が育てられることが指摘される。そして、災害文化の継承には防災教育の担い手の存在が重要であること、担い手たちの間で災害文化の継承にかかわる災害観を共有し、長期にわたって防災教育を続けるなら、その取り組みそのものが地域の文化となっていくことが論じられる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 内 泰 介

副 査 教 授 佐々木 亨

副 査 准教授 橋 本 雄 一

学 位 論 文 題 名

災害文化の形成と継承に関する社会学的研究

－北海道における津波災害と噴火災害を事例として－

本論文は、北海道奥尻町および有珠山周辺地域を事例に、災害を経験した人々がどのような「災害文化」を形成・継承していくのか、また、その形成・継承の要因となっているものは何かということについて、災害社会学的な観点から論じたものである。

本論文の成果として、以下の2点をあげることができる。

第一に、阪神・淡路大震災以来、災害をめぐる社会学的研究は日本でにわかに盛んになったが、災害にもさまざまなバリエーションがある。本論文は、これまで社会学的な研究が進んでいなかった北海道における津波災害と噴火災害について、長期のスパンでの調査を行なったたいへん貴重な研究である。その成果は、災害研究、とりわけ災害社会学にとり、新たなデータを数多く提示し、日本の災害研究、災害社会学にとって前進をもたらした。第二に、災害文化研究としても、これまで調査されていなかった被災地のデータに基づき、新しい知見を出している。

本論文は、定池氏の長年にわたる奥尻町および有珠山周辺地域における調査研究の集大成であり、災害文化についての新たな社会学的研究としても評価できる。貴重な調査に基づくこの論文は、今後災害研究において参照される研究であることは間違いない。理系分野中心の研究成果の蓄積が目立つ災害研究・防災研究において、人文社会科学系からのアプローチの重要性を示す上でも貴重な研究である。しかし一方、従来の災害文化研究に比べ新規性が十分には示せていない点や、長年の調査のデータが十分に生かしきれていない点など、若干の問題を残している。しかしこれらの問題は今後の研究により乗り越えられるものと推察される。本研究の成果の一部はすでに査読付き学会誌などに複数掲載されており、関連学会での数多くの報告をすでに行なっていて、学界でも一定の評価を得ている。

以上のことを総合的に評価し、本委員会は、本論文の著者定池祐季氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。